

第5章 友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響 についての理論的検討

第1章、2章、3章においては、中学生を対象として目標志向性の観点から抑うつ傾向の発生メカニズムを検討する意義が論じられた。そして、第4章においては、対人関係、その中でも特に友人関係という文脈の中で、抑うつ傾向の発生メカニズムを検討する重要性が論じられた。そこで、本章では、友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響についての既存の研究を検討する。

目標志向性とは、「ある状況における個人の活動の目的や目指していること」であり、「その達成に向かって個人の認知・感情・行動を方向づけるもの」とであると定義される* (Dweck, 1996 ; Dweck & Leggett, 1988 ; Elliot & Harackiewicz, 1996)。友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響については、Dweck & Leggett (1988) が理論化を試みている。そして、Dweck & Leggett の理論を検討する研究としては、Erdley, Cain, Loomis, Dumas-Hines, & Dweck (1997) の実験的な検討がある。

そこで、まず、Dweck & Leggett (1988) の理論を概観し (第1節)、次に、Erdley et al. (1997) の研究を検討する (第2節)。

* 本研究においては、目標志向性という用語の中の「志向性」という言葉は、目標の「方向性」を意味する。より具体的には、後述するように、「経験の獲得や自己の成長を目指す」という方向、「良い評価の獲得を目指す」という方向、「悪い評価の回避を目指す」という方向を意味する。

第1節 Dweck & Leggett (1988) の理論の概観

友人関係における失敗に直面した時に、ある子どもは非抑うつ反応を示すが、別の子どもは抑うつ反応を示す (Goetz & Dweck, 1980)。例えば、友達になろうとした相手から拒絶された時、ある子どもは、「相手への働きかけ方を変えてみよう」とポジティブに考え、相手との関係を再度築こうと努力するのに対して、別の子どもは、「自分はダメな人間だ」と悲観的になり、それ以上相手に働きかけることをやめてしまうのである。友人関係での失敗に対するこのような反応の個人差は、何故生じるのであろうか。

Dweck & Leggett (1988) は、このような反応の個人差を説明する理論として、目標志向性理論を提唱している* (Figure 5-1)。つまり、それぞれの子どもが友人関係で目指している「目標」の違い(「目標志向性」)が、友人関係での失敗に対する反応の違いをもたらすと仮定している(同様の主張として、桜井(1995, 2000)を参照のこと)。

Dweck & Leggett (1988) によれば、友人関係において、「社会的属性(パーソナリティや社会的スキルなど)をよりよくしようとすること」、「対人関係を構築したり、発展させたりすること」、あるいは「社会的視野や対人的経験を獲得すること」を目指す「学習目標」をもつ子どもは、友人からの拒否や友人との葛藤といったネガティブな出来事に遭遇した

* Dweck & Leggett (1988) の理論において取り上げられている反応は、正確には「非抑うつ傾向」、「抑うつ傾向」ではなく、「熟達志向反応 (mastery-oriented behavior pattern)」、「無力感反応 (helpless behavior pattern)」であり、抑うつ傾向とは若干異なる。ただし、Dweck & Leggett によれば、無力感反応の定義は「自分は無能であるという認知、抑うつ感情や不安などのネガティブな感情、持続性の欠如」とされており、第1章で述べた「抑うつ傾向」の定義と一致するところが多い。また、熟達志向反応は「やればできるという認知、課題への熱心さなどポジティブな感情、持続性の維持」と定義されており、抑うつ傾向とは反対の反応として捉えられる。従って、本研究では、論文全体の統一性も考慮し、無力感反応、熟達志向反応をそれぞれ、抑うつ傾向、非抑うつ傾向とよぶことにする。

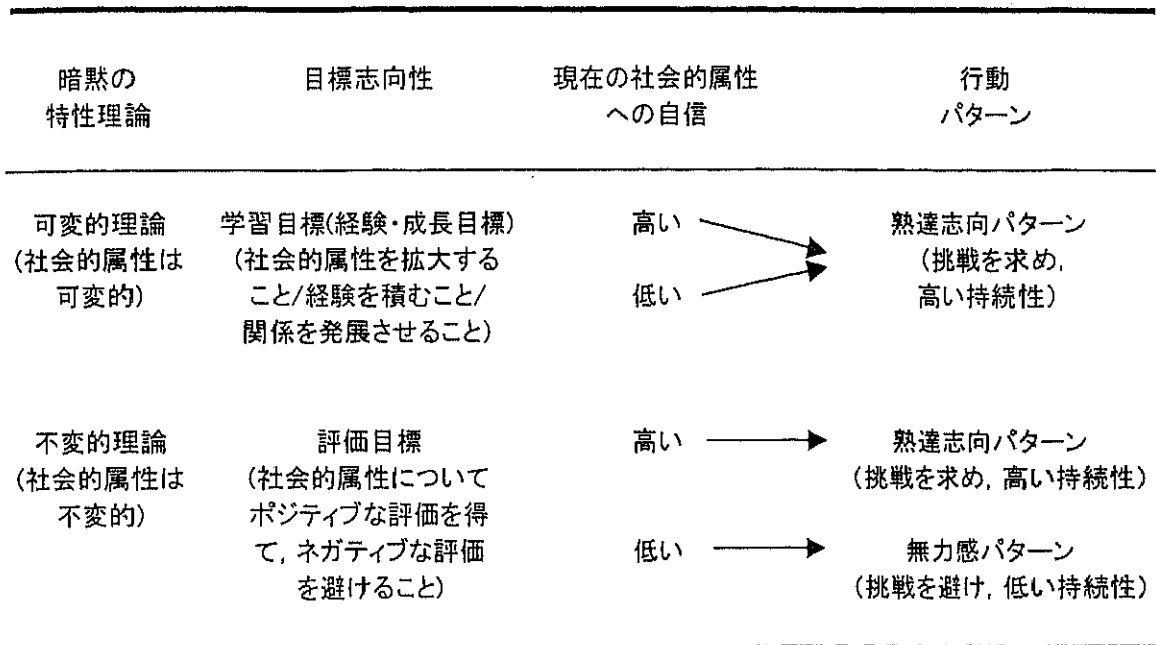


Figure 5-1 Dweck & Leggett(1988)の友人関係における目標志向性理論

時でも、抑うつ傾向を示しにくい。一方、「社会的属性（パーソナリティや社会的スキルなど）について良い評価を得て、悪い評価を避けること」を目指す「評価目標」をもつ子どもは、友人関係でネガティブな出来事に遭遇した時、抑うつ傾向を示しやすいとされている。

また、Dweck & Leggett (1988) は、評価目標が抑うつ傾向に及ぼす影響に関しては、評価目標と社会的属性の自信との相互作用を仮定している。つまり、評価目標をもつ子どもの中でも、特に社会的属性への自信の低い子どもが抑うつ傾向を示しやすいと仮定されている。一方で、学習目標をもつ子どもに関しては、社会的属性についての自信の有無に関わらず、抑うつ傾向を示しにくいと仮定されている*。

第2節 Erdley, Cain, Loomis, Dumas-Hines, & Dweck (1997) の研究

友人関係における Dweck & Leggett (1988) の目標志向性理論を検討する研究としては、Erdley, Cain, Loomis, Dumas-Hines, & Dweck (1997) の実験的な検討がある。彼女らは、学習目標と評価目標に方向づけられた被験児が、ペンフレンドをつくるという課題の中での相手からの拒絶に対して、どのように反応するかを検討している。仮説は、学習目標に方向づけられた子どもより、評価目標に方向づけられた子どもの方が、拒絶された後に抑うつ傾向を示すであろうというものであった。

* さらに、Dweck & Leggett は、目標志向性を規定するパーソナリティ特性として、「特性についての暗黙の理論」(implicit theory of trait) を仮定している (Figure 5-1)。特性についての暗黙の理論とは、個人が自己の特性について、可変的なものとして捉えているか(可変的特性観)、それとも不変的なものとして捉えているか(不変的特性観)を表す概念である。しかし、本研究では目標志向性が抑うつ傾向に与える影響と、両者に介在するメカニズムに主要な関心があるため、特性についての暗黙の理論については検討しない。

手続きは、次の通りであった。目標志向性を教示により操作した後、被験児がこれからペンフレンドになろうとしている他の小学校の子ども（架空の子ども）にマイクロフォンを通じて手紙を送る。その後、実験者が、相手の子どもが被験児の手紙を拒絶したことを伝え（虚偽のフィードバック）、再度被験児に手紙を送るように働きかけるというものであった。被験児の拒絶経験後に返送した手紙の内容と、拒絶に関する認知が、抑うつ傾向の指標であった。具体的な抑うつ傾向の指標は、①1回目と2回目の手紙の中で用いた、異なる友達作り方略の数の変化、②1回目と2回目の手紙の長さの変化、③手紙の内容（自分に関する情報、相手への質問、相手へのポジティブな感情など、8つのカテゴリー）、④拒絶に対する原因帰属（「働きかけようとする努力が足りなかったから（努力帰属）」、「相性が悪かった（incompatibility）から（相性帰属）」、「自分の好ましさや友達作りの能力がないから（社会的能力の不足）」の3つ）、⑤拒絶後相手に再度手紙を送ることを断ったかどうか、の5つであった。

5つの抑うつ傾向の指標についての結果を詳細に検討してみると、理論通りになった指標は、①の異なる方略の数の変化と、③の手紙の内容の一部（8つのカテゴリーの内4つ）のみである。学習目標群と評価目標群で有意差のみられなかった指標の内、注目すべき結果は、④の原因帰属と、⑤の手紙の返送の拒否に関する指標である。原因帰属に関しては、Erdley et al. (1997) と同様の方法で対人拒絶後の抑うつ傾向について検討した Goetz & Dweck (1980) の研究や、絶望感理論 (Alloy et al., 1988) において、抑うつ傾向と最も関係していると考えられている、社会的能力の不足への原因帰属が、学習目標群と評価目標群で有意差がみられなかった。さらに、Goetz & Dweck (1980) の研究で適応的とされて

いる相性帰属は、Erdley et al. (1997) の研究ではむしろ評価目標群の方が得点が高かった。そして、⑤の手紙の返送は抑うつ傾向をよく表すと考えられるが、学習目標群と評価目標群とで有意差が見出されなかった（手紙の返送を拒否したのは、31名の学習目標群の内2名、32名の評価目標群の内6名であった）。最後に、②の手紙の中のメッセージの長さに関しても、学習目標群と評価目標群の差は有意傾向にとどまり、大きな差は見出されなかった。

また、Erdley et al. (1997) の研究では、Dweck & Leggett (1988) の理論において仮定されている、評価目標と社会的属性についての自信との交互作用の抑うつ傾向に及ぼす影響についても検討を行ったが、いずれの抑うつ傾向の指標に関しても、理論通りの結果が得られなかった。